

東アフリカ・ザンジバルの建築様式と村落の構造 -アラブ交易の影響に着目して-

角田さら麻

滞在期間：平成 2012 年 7 月 2 日～2012 年 9 月 14 日

調査地概要と目的：

東アフリカ、タンザニアのイント洋沿岸部は、紀元前より東南アジアや中東との交易をとおして、アラビア半島の文化と土着のアフリカ大陸文化が交流してきた。この長い期間を経て、東アフリカ沿岸部は、独自の「東アフリカ・コースト文化」を発達させてきたことで知られている。それは、今なお地域に多く暮らすアラブ系移民、イスラーム教が担う役割の重要性、中東からの影響を受けた建造物や町並みなど、可視的な要素に留まらず独自の色濃い文化を形成している。

私の研究は、これらの地域に展開する独自の文化を対象としながら、特に建造物・集落の構造のなかにイスラーム文化とアフリカ諸文化との接合、そしてその接合によって生み出され、培われてきた建築様式に着目する。集落における基本的構成要素である家屋、役場、学校や病院など、これらがどのような意味をもっているかを調べるため、建造物についての詳細な調査を行う。それぞれの建材・構造・工法を詳細に調査し、建材と技術が周辺の生態環境と風土にどのように対応しているかを明らかにする。建物や集落の構造に関する調査を通して、アフリカにおけるイスラーム文化、本土の政治政策の影響について考察をしていく。

フィールドワークから得られた知見：

私は、調査地である、ペンバ島農村部 G 地区において派遣当初に目的としてあげていた全家屋の形態・構造・工法・材料の調査をおこなった。これにより調査地の家屋の全体像を把握することができた。GPS を用いて家屋の位置を地図上にプロットし、家屋の位置関係を可視化するとともに、家屋の建設履歴や建築材料の種類と入手先などを調べ、その歴史の変遷を明らかにすることもできた。調査地の家屋は、近年まで建築材料を周辺環境に強く依存していた。しかし、長年の森林伐採のため建材の木材が減



写真 1：調査地の風景

少したという現状から、非常に限られた環境下で建材を入手していることが明らかとなった。

家屋の建設費にあてられるのが、調査地で 19 世紀に導入された香辛料のチョウジの販売から得る収入である。調査地を含め、ペンバ島の経済はチョウジに強く依存しており、食料から日用品の多くを島外から輸入するためには不可欠である。チョウジの販売価格は長年低迷しており、地域住民の価



写真 2 : 家屋の玄関前でくつろぐ住民

格の高騰や急速に進んだインフラ整備の影響をうけ、使用する建築材料におおきな変化がみられた。

家屋の工法には、材料に施す処理や用途などにさまざまな工夫がみられたものの、家屋の基本的な形態は長年、地域内で共有されていたことが伺えた。地域では、家屋の多くに施される外壁の装飾、重厚な建具（扉や窓）、母屋に付随される棟に中庭をもうけるなど、高温多湿な自然環境や地域住民の生活習慣に適した構造であった。確保・維持された空間や装飾の多くは、前回（2012 年初旬）の現地調査でアラブ的特徴として確認したものであり、確保・維持される経緯について今後検討していきたい。

今回のフィールドワークは、京都大学若手研究者育成 JASSO ショートビジット派遣プログラム(平成 24 年度)の助成をうけて実施することができました。ここに記し、深く感謝申し上げます。